

トランスジェンダー をいきる (21)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

力関係を意識させられる他者(2)

家族へのカミングアウト

1 はじめに

体・書類上の性別は女性、性自認が男性である筆者は、ときに必要以上に相手との「力関係」を意識させられる場面が多い。とりわけ、視覚に障害のある筆者に対する他者からの直接的・間接的な支配、もしくは力の行使によって、筆者が苦痛を感じたとき、即座に「ノー」の意思を表明できなかつたことへの無力感とふがいなさ・恥といった感情は、ともすれば自己の構築してきた男性性を一気に失墜させられるのでは、という危機感を覚えてしまう。

今回は、こうした力関係を意識させられる「他者」の代表的な例として、医療者、もしくは医療現場、つまり、筆者が受信した2件のジェンダークリニックでの事例を挙げたが、今回は、筆者と家族との関係を通じて、家族へのカミングアウトの事例を中心に考察してみたい。

2 筆者と家族との関係性

筆者は、牛若家の長女として出生し、女の子として育てられたのだが、子どものころから視覚に障害があったことに加え、3・4歳ごろから、自分は男の子だと思えるようになっていた。そのような筆者に、明治生まれの父方の祖母からは、たとえ視覚に障害があっても、将来は家族に頼らず、1人前に独立しなくてはならないと教え込まれた。祖母は、筆者が祖母の期待に沿うようなこと（たとえばよい成績を収めた、当時習わされていたピアノの練習の成果が認められ、発表会に出場して高い評価を得たなど）に答えたときは、今から考えると異常なほど褒めた。褒めたというより、褒めそやした、と表現した方がよいかもしれないほど、祖母は筆者に対して情緒的に接していた。筆者は子供心に、祖母のそのような接し方に違和感を覚えながらも、ここは一つ、男の子として、祖母の期待を裏切るわけにはいかない、と思い、黙々と努力していた。その一方

で祖母は、筆者に「女の子らしくあること」を教え込もうとしたのだが、「女の子やったらめそめそするな、女の子ははきはきものを言え」という祖母の教えが、社会の風潮とどこかミスマッチであることを、筆者は子ども心になんとなく気づいていた。このような体験が、結果的には現在の筆者の男性性を構築する源になっていると思われる。

筆者が一番心を痛めているのは父と兄との関係である。特に、筆者と父は、何かと言い争いが絶えなかった。父は筆者に、女の子らしい服装や、女の子らしく軟らかなものの言い方を強要する。筆者はその度に父と口論になり、あるときには父につかみかかったり物を投げたりして怒りを爆発させる。ヒートアップしている2人を見かねた母が仲裁に入ってくれるも、些細なことで言い争いが再燃する、という悪循環を延々と繰り返す。父は、機嫌のよいときは筆者に優しいのだが、いったん機嫌が悪くなると、母や筆者、つまり、女性の体を持つものに対して辛く当たりをする傾向にある。特に、筆者のように障害があり、ジェンダーは男の子でも、体は女の子であるということが、機嫌の悪い父にとっては2重の好条件で、筆者に当たりやすかったのだろう。筆者にとって父は、父と子の力関係とは別の力関係を意識させられる相手、ということがいえるだろう。

兄とはといえば、父から視覚に障害の有る女の子の筆者を「守ってやれ」と言い渡されていたのか、口げんかをして、筆者に辛く当たることはなかったように思う。その代わりに、自分の気持ちを言語化したり、感情を露にしたり、ということが少なかった性か、筆者にしてみると、「何を考えているか分からない不気味なやつ」として敬遠していた。

筆者にとっては、母との関係性が一番安定していると思われる。母は、女性の体を持ちながらも、それ以上に男性性が強い。そのために、筆者と母の間でも口論になるのだが、父と違って母は筆者に、反論できないようなことを言って、筆者の言い分を説き伏せたり、筆者の論理の誤りを指摘する。その一方で、高校を卒業し、鍼灸マッサージ師免許を取得する年齢になってもなお、女の子の服装を嫌う筆者と買い物に行ったとき、紳士物ではないにしても、できるだけ紳士物に近い洋服を選ばせてくれることもあった。ただ、筆者が時々紳士物の服で実家に帰省したときなどは叱責し、その度に筆者と言い争いになった。

以上、筆者と家族との関係を簡単に見てきたが、筆者を含め、障害当事者にとって家族の存在は、多かれ少なかれ、支配・非支配の関係になりやすい。そこには、「あなた（障害当事者）のことは、私たち（家族）が一番よく分かっている」という家族の思い込みから、しばしば障害当事者のニーズや希望などの主張が無視されたり、軽視されたりする。以下では、筆者の家族を事例に、父や兄に、筆者の思いや主張が通じなかったことについて詳述する。

3 祖母と母が亡くなった後の父と兄との関係

①父への「反抗」

「性同一性障害」という言葉が社会的に認知され始めた1996年、祖母が亡くなった。祖母の死をきっかけに、筆者はいよいよ男として生きていきたいという希望を具体的に持つようになった。既に、一人暮らしをして3年ほど経っていたので、男物の衣服を着用して通勤していたが、

帰省の際は、女性物の衣服で、ジェンダーも女性物に着替えるように心がけていた。しかし、単発にしていたので、帰省の度に父からは酷くののしられ、罵声を浴びせられた。

2007年5月、母が亡くなった。亡くなる2、3日前、父から母の容態が急変したことを告げる電話があったとき、父は次のように言った。「あんた、髪の毛の短い頭で帰ってきたら承知しないぞ！」と。その瞬間、筆者の中でぱちんと何かが切れる音がした。

(いよいよ「父への反抗のときが来た」というように、筆者は電話口で父に向かって言った。「お前は今、お母さんが死ぬかもしれないと言う言うことで電話をかけてきたんだろう。そのことと、俺の身だしなみとどう関係があるのか言ってみろ！」あきれた父からは、「親に向かってそんな口の聞き方があるか」と言ったきり、答えはなかった。筆者の家では通常、「目上の人には口答えしてはならない」というのが、暗黙のルールとしてあったのだが、筆者はこの家の「暗黙のルール」を破って、父に向かって反撃ののろしを上げたことになる。そのことで筆者としては、「この問題は、俺が決めて、俺が全部責任を取る。お前(父)にはもう、何も言わせないし、異論を挟む余地も与えない」というメッセージを父に向かってぶつけたわけであるが、実家に帰省し、通夜・葬儀に参列したとき、父はなおも筆者の身だしなみについて事細かに文句を言っていた。

父にしてみれば、筆者への身だしなみに口出しするという行為は本の些細なことであって、それ以上の深い意味はないのだろうが、筆者にしてみれば、またしてもここで、父との「力関係」を意識させられる。その「力関係」というのが、単なる父と子のみならず、障碍の有る娘と健常者の父、もっといえば、障碍のある女と健常者の男、というように、力関係の質まで異なってくる。筆者は、父との間で、複数の「力関係」を意識させられたことで困惑し、「犯行」という強い態度に出たのであろう。

②父と兄へのカミングアウト

2008年2月、某大学病院のジェンダークリニックに通い始めたころ、父と兄に電話で、生来からの体の性別への違和感についてカミングアウトした。本来であれば、実家に帰省して、父と兄と向かい合って、きちんとカミングアウトするのが筋として正しいのだが、視覚に障碍の有る筆者の「重要な決定」に対して、常に無視するか、軽視するかで、まったく取り合ってもらえないことが多かった。そこで、ともに相手の表情の分からない・声だけの電話でのカミングアウトであれば、筆者だけがいつも健常者の父や兄から一方的に「見られる」という不平等を味わわなくてもよい、という理由がその背景にあった。

父からは、「そういう兆候があることは、亡くなったお母さんから聞かされてはいるが、お前は目が見えないから、女としてのよさが分からないだけ」と言って、やはり取り合ってもらえなかった。「男になったら、酒でも酌み交わそう」と冗談を言ってみても、「そんなやつとは酒も酌み交わしたくない」と一蹴された。兄からは、「あんたはなんでも好きなようにしとるから、これからも好きなようにすればよい」と、こちらも投げやりな言い方であった。「好きなようにすればよい」という言い方は、一見その生き方や考え方が認められたように思われるかもしれないが、実際に兄からそのように言われた筆者にしてみれば、単なる投げやりでしかなく、心ここにあら

ず、といった調子で、およそ関心ももたれていないような冷たい雰囲気をかもし出していた。筆者は未だに兄の「好きなようにすればよい」という言葉に怒りを禁じえない。やはりここでも筆者は、健常者である兄、もっといえば、健常者である男に対する「力関係」を意識しているのかもしれない。

4 終わりに

女の体を持つ祖母と母が亡くなったことで、筆者の家族は男ばかり。やはり、男と言うものは不器用で、言葉の選び方が下手、といわなければならないだろう。そして、カミングアウトする筆者もまた、ジェンダーが男であるから、カミングアウトの仕方が「下手」なのだろう。加えて、筆者のように障害がある場合、「どうせ何を言っても取り合ってもらえない、現にずっとそうだったから」というあきらめにも似た心理状態が、カミングアウトを逡巡させてしまう。家族だから否定されたくない、と思うばかりに、大事なことがなかなか伝わらない、といのはどこの家族にもあることだとは思いますが、とりわけ筆者のように障害のある場合、もう生き方に協力してくれないのではないか、絶縁状態になってしまうのではないかなど、マイナスの方向に考えてしまいがちになる。タブーの多いこの社会。だからこそ、カミングアウトに慎重にならざるを得ないのではないだろうか。